

報徳における道德と経済

大貫 章

目 次

- 一 議論の前提——「報徳とは」——
- 二 財が本か、徳が本か
- 三 報徳とは神儒仏三味一粒丸
- 四 儒仏は中流、神道は源流
- 五 天地開闢から人道樹立まで
- 六 天祖推譲を以って人道を立つ
- 七 「田徳」は人倫を扶助する
- 八 若干の釈明

一 議論の前提——「報徳とは」——

この小論は、道德と経済とをどのように調和・融合ゆうごうさせるかという難しい問題に対して、二宮尊徳が創始した「報徳」という思想哲学体系では、どのように考えているか、ということについての私なりの理解を提示するものである。まず、議論の前提として、「報徳とはどういうことか」について概略を述べさせて頂きたい。

小田原藩の殿様大久保忠真公から、分家の旗本宇津家四千石の桜町領（栃木県芳賀郡二宮町）の財政再建を依頼された尊徳・二宮金次郎は、米の生産高（および年貢収納額）を十年で二倍にする、という目標を立てて、みごとにそれを実現した。

殿様との約束の十年目に当たる天保二年（一八三一）の正月（尊徳四十五歳）、老中首座になっていた大久保忠真公が將軍家斉の代参で日光東照宮に参詣し、その帰りに桜町の近くの結城という所に宿をとった。尊徳はヤマノイモ（自然薯）を手土産にして殿様にお会いした。その時、殿様から桜町でのやり方を尋ねられたのに対して、尊徳は次のように答えた。

「荒地地には荒地地の力があります。荒地地は荒地地の力で起こし返しました。人にもそれぞれ良さや取り柄があります。それを活かして村を興してきました。」

これに対して殿様は、「そちのやり方は『論語』（憲問篇）にある「徳を以って徳に報いる」という、あれだな」と言われた、と言いつた。尊徳はこの言葉に感激し、その後、「徳」および「報徳」という言葉を中心に据えて、自分の思想体系を練り上げていくようになったのである。尊徳は物や人に備わる良さ、取り柄、持ち味のことを「徳」と名づけ、それを活かして社会に役立てていくことを「報徳」と呼んだ。荒地地にも荒地地なりの徳（良さ、取り柄）がある。荒地地の徳を人間の徳が活かすことによって、実り豊かな田畑に変えていくことができる。ワラの徳を活かして、ナワやワラジ、タワラなどの新しい徳を作ることができる。これが「報徳」なのである。

尊徳は「あらゆるものに徳がある」と考えた。これを「万象具徳」という。このことを小田原

にある報徳博物館の佐々井典比古理事長は、次のような詩で表現されている。

どんなものにも よさがある
 どんなひとにも よさがある
 よさがそれぞれ みなちがう
 よさがいっぱい かかれてる
 どこかとりえが あるものだ
 ものとりえを ひきだそう
 ひとのとりえを そだてよう
 じぶんのとりえを ささげよう
 とりえとりえが むすばれて
 このよはたのしい ふえせかい

「ふえせかい」というのは、田畑という有限の資源も、有効に活用すれば無尽蔵に米や野菜などを産み出すことができる、という意味で、「いっぱいふえせかいのふえせかい」と表現した尊徳の言葉なのだが、ここでは、少し簡略化して、人間の勤勞によって付加価値（社会的経済的な効用）が増加すること、と理解しておきたい。（報徳博物館刊『やさしい報徳のはなし』参照）

尊徳は「徳」という言葉を普通の意味とは少し違う意味を込め、物や人に備わる良さ、取り柄、持ち味、長所、美点、可能性などという意味を含めた広い意味で使っている。そして、「報いる」とは、これらの徳を活かし、発揚することである。別の言い方をすれば、物や人が持つ潜在的な可能性を実現し顕現することである。ひらたくいえば、物の取り柄を引き出し、人の取り柄を育て伸ばし、自分の取り柄を提供して、それらの取り柄や持ち味をさらに活かしていくことである。活かすとは、世のため人のために役立てることであり、社会的経済的に有用な価値を産出することである。そして、そのことがその物や人の徳に報いることになるのである。

尊徳は「天地人三才の徳に報いる」と表現している。天地とは自然のこと、人とは社会のこと、つまり、自然の恩徳と社会の人々の恩徳に感謝して、各自がそれぞれの持ち場で互いにその勤めを果たし合うこと、これが報徳である。

「わが道は徳に報いるにある。徳に報いるとは何か。天地人三才（三つのはたらき）の徳に報いることである。三才の徳に報いるとはどういうことか。日月が運行し、四季が循環し、万物を生滅してやむことがないのは天の徳である。草木百穀が生じ、鳥獸魚類が繁殖し、人をして生命を養わせるのは地の徳である。祖宗が人道を設け、王侯が天下を治め、家老武士が国家をまもり、農民が農業に勤め、工人が大小建築物を造り、商人が有無を通じて、人生を安らかにしているのが人の徳である。三才の徳というものは、何と大きなものではないか。

人が世にある以上は、三才の徳によらないものはない。ゆえに、わが道は、その徳に報いることを本とするのである。上は王侯から下は庶民にいたるまで、おのおのその天分にとどまり、節度を立て、勤儉を守り、分外の財を譲って報徳の資材とし、これによって荒地をひらき、負債をつぐない、貧窮をめぐみ、衰村を立て直し、廢国を興す。その実施は、一家から二家に及ぼし、一村から二村に及ぼし、漸次、一郡・一国・天下に及ぼし、ついに海外万国に推し及ぼすのであって、これぞ天地人三才の徳に報いるゆえんなのである。」

二 財が本か、徳が本か

明治以後、報徳の思想は「報徳社」という協同組合のような結社の活動として受け継がれ、主として静岡県内で展開された。この報徳運動の発展に中心的な役割を果たしたのが掛川の岡田良一郎である。彼は十六歳のとき日光今市で晩年の尊徳に師事し、兄弟子たちに混じって実地の修行を積み、報徳の実践哲学を体得した。後に彼は各地の報徳社を結集し大日本報徳社を設立して初代社長に就任した。

その岡田良一郎は、明治十三年（一八八〇）に著した『報徳富国論』という著作の中で「（二宮）先生曰く財ハ本ナリ、徳ハ末ナリ」と書いた。この本を贈られた相馬（福島県）の富田高慶——尊徳の一番弟子で、尊徳の伝記『報徳記』の著者——は激怒して、「狂せるかな良一郎」としかりつけた。また尊徳の孫の尊親も「祖父はそんなことは言っていない」といって、この本を突き返した。

たしかに、尊徳は、天保五年（一八三四）に書いた『三才報徳金毛録』という著作の中で「徳ハ本ナリ、財ハ末ナリ」と書いている。

だが、しかし、はたして岡田良一郎は尊徳の思想を誤って理解したのだろうか。ことはそう単純ではない。尊徳が弟子たちに語り、弟子たちが尊徳の言葉として書き残したものの中には、「財ハ本ナリ」と受け取られても仕方のないような表現が少なくないのである。たとえば、福住正兄の『二宮翁夜話』の中の次のような一節も、その一つである。

「宇津氏〔宇津 鈞之助〕尊徳が初めて村おこしの仕法の事業を遂行した下野国桜町領の領主〕の馬が、厩から放れて邸内を駆けまわっていた。人々が大いに騒ぎ立てていると、別当が出てきて、静かになさい静かになさいといって、飼葉桶をたたいて小声で呼んだところ、さも荒々しくはねまわっていた馬が急に静まって、おとなしく飼葉についた。翁はこれを見ていわれた。——そなたたち、よく心得るがよい。世の中は何もむずかしいことは決してない。犬も、来い来いというばかりでは来ないが、時々食いのものをやって呼べばすぐ来る。なすもなれなれといつてなるものではない。肥しをすれば必ずなる。ねこの背中でも、毛並になれば知らぬふりして眠るし、逆さになでると一ぺんでつめを出す。私が桜町を治めるにも、この道理にのっとつて、勤めて怠らなかつただけなのだ。」

また次のような歌も「財ハ本ナリ」に近いといつてよいであろう。

我というその大元を尋ぬれば

食うと着るとの二つなりけり

尊徳が生涯を通じて成し遂げた事業・業績は「仕法」と呼ばれており、仕法とは米の増産という村おこしである。つまり経済的に疲弊した農村を救済する経済的な活動であった。尊徳が経済的な事柄を重視するのは当然といえれば当然である。

さて、しかしながら、尊徳の思想を「財ハ本ナリ、徳ハ末ナリ」と理解することは、やはり誤りといふべきである。尊徳自身は『大円鏡』という著作の中で「財徳一元」と表現している。このことから、後に——明治以後——尊徳の研究者たちは尊徳の思想の特徴の一つを「道徳経済一元」と呼んでいる。なぜそのように捉えられるのか、さらに考察を進めていきたい。

三 報徳とは神儒仏三味一粒丸

尊徳が報徳という思想体系を構築するに際して根拠・素材としたのは、神道・儒教・仏教の三つである、と尊徳自身が語っている。「わが法は神・儒・仏のそれぞれの正味を混合して丸薬としたもの、つまり神儒仏三味一粒丸である」と次のように述べている。

「私がわが法を創設するにあたっては、神道は何を道とし、何が長所で何が短所か、儒教は何を要点とし、何がすぐれ何が劣るか、また仏教は何を主とし、何が得手で何が不得手かと、それぞれの原理を窮め、三教を合して興国安民の一大法としたのである。薬でいえば三昧を合して一粒丸としたようなもので、国家衰廢の病にかかった者がこれを服用すれば、なおらないということがない。」

そして、神道・儒教・仏教のそれぞれの正味（特長）の内容として、「神道は開国の道、儒教は治国の道、仏教は治心の道」と語っている。

尊徳のいう「開国の道」とは、稲作・農耕いわゆる農業によって国が豊かに開けたことである。とりあえず「経済」と呼んでおきたい。なお、尊徳が実践した「米の増産による村おこし」の事業は、「仕法」と名づけられており、報徳の精神で行なわれる仕法は「報徳仕法」と呼ばれている。これこそが二宮尊徳の実践哲学を一言で表現したものである。

次に、「治国の道」とは、『大学』の中で展開されている「修身→齐家→治国→平天下」の「治国」であり、まさに「政治」のことである。現代的に表現すれば、ガバナンス、マネジメント、リーダーシップなどにかかわるテーマである。

最後に、「治心の道」とは、人間の心の持ち方の問題である。尊徳の言葉に従えば、「天の御気に叶い候や……」[自分の行為が天の意志に合致しているかどうかを反省すべし、という意味]と

か、「銘々の一心にあり……」[一人一々の心がけの問題である、という意味]「などという人間の心理や行動にかかわるテーマである。一応、「道徳」と呼んでおきたい。

以上でわかるとおり、尊徳の思想体系には「経済・政治・道徳」の三つが混然一体となって包含されており、これが「三昧一粒丸」の中身である。「なお、今回の小論では「政治」の問題には余り深入りしない予定である。」

四 儒仏は中流、神道は源流

神・儒・仏の話には続きがある。それぞれの分量について尊徳は「神道二さじ、儒仏一さじずつ」と述べている（『語録』二五）。なお『夜話』（三六、原書三三）では「神道一さじ、儒仏半さじずつ」と語っている。いずれにせよ、神道の分量が多い、と尊徳は考えていたのである。

また、川の流れたとえると、儒仏は中流であり、神道は源流である、と次のように語っている。

「大昔には法というものはなかった。なぜならば、原始時代には、生民はただ食を求めめるだけであった。だから何の法もあるわけではない。中ごろになって、田畑が開け、人民の数もふえてから、はじめて祖宗が法を設けて、天下を治めたのである。法は、たとえば橋とか舟のようなものだ。今日から孔子や釈迦を見ると、ちょうど水源のように見えるけれども、それはすでに原始時代を去ること幾千年の後のことなのだ。下流からずっと上流の橋を眺めれば、やはり

水源のように見えるが、その橋の上に立ってみれば、水源ははるかかなたの深山幽谷にあることがわかる。そしてそれは、ちよろちよろとした細い流れで、何の橋もいりようがなく、何の舟もいりようがない。ところで、いくつものそうした細い流れが集まって、はじめて大きな川になるが、こうなれば橋もなければならず、舟もなければならぬ。孔子や釈迦は、その橋から下流のことを説いたものなのだ。」

以上のことからわかるとおり、尊徳は尊徳が言うところの「神道」なるものを儒教や仏教よりも重要な意味を持っていると考えていたのである。では尊徳が言うところの神道なるものとは、一体、どんなものなのだろうか。

五 天地開闢から人道樹立まで

尊徳が、チャールズ・ダーウィンより約三十年も前に、かなり正確な進化論を書き残していることは、研究者たちの間ではよく知られている（『全集』一卷「万物発言集」他）。尊徳の進化論に従えば、初めに、混沌から天地が開闢した。これが宇宙と地球の誕生である。最初の地球上には生物は生息していなかったが、何万年か経って、地面の湿った所に初めて苔のようなものが生じた。これが生命誕生である。その後、また何万年か経って草や木が生じ、さらに虫や魚が生じ、鳥や獣が生じた。そして最後に人類が誕生した。

誕生したばかりの人類は鳥や獣と大差のない原始的な生活を営んでいたが、やがて知恵のある人——聖人——が現れて、稲作・農耕の道を開き、さらに仁・義・礼・智・信などの人倫の道を樹立した、と尊徳は言う。弟子の斎藤高行の著作『二宮先生語録』（佐々井典比古訳）によって尊徳の進化論を紹介することとしたい。

「世界のはじめを考えると、最初は混沌たるものであったが、それから澄んだものと濁ったものが分かれ、おのずから開けて天地となった。そして日月が運行し、昼夜が循環し、寒暑が往来し、風や雲が雨や露、雪、霜をもたらすようになったが、まだ生物を生じないままで幾万年も経った。これがつまり神世というものである。」

そののち、春から夏にかけて、雨や露の潤すところに、始めてこけ類が生じ、そして秋から冬にかけて、雪や霜が降りれば枯れ滅びた。年々生滅をくりかえして、地味が肥えたところに、草や木が生じた。それから虫や魚が生じた。それから鳥や獣が生じた。それから人類が生じた。それがまた幾万年たったかわからない長い間のことである。……こうして、草木・虫魚・鳥獸がすでに生じてから、人類が生じた。そこで草木・虫魚・鳥獸をもって衣食とし、わずかに飢えと寒さをしのいだが、まだ人道（傍点、筆者）が立たないまま、また幾万年か経った。そののちすぐれた祖宗（原文「神聖」）が出現して、五穀九菜の種を選び、湿地をひらいて水田とし、乾地をひらいて畑として、農業の道を教えた。それで始めて五穀が熟し、食物が足りる

ようになった。

ここにおいて父子・夫婦・長幼・朋友の道〔四倫の道〕が成り立ち、人道が定まった。しかし、そのうちに凶暴な者が出て来てその道をやぶり、人民に害をなした。祖宗はそこで、衆を率いてこれをうち懲らし、農民をまもった。ここにおいて君臣の道が立ち、五倫の教えが全部備わったのである。〔16〕

生物学的には人間も動物の一種である。だが、人間は他の動物とは異なる大きな特徴を備えている。人間を他の動物と区別するもの、人間を人間らしくするもの、これが「人倫の道」であり、尊徳はこれを「人道」と名づけている。これに対して動物的な所業のことを彼は「鳥獣道」とか「畜道」と呼んで人道と区別している。なお、人間も、時には——むしろ、しばしば——鳥獣道を行なっていることはいうまでもない。

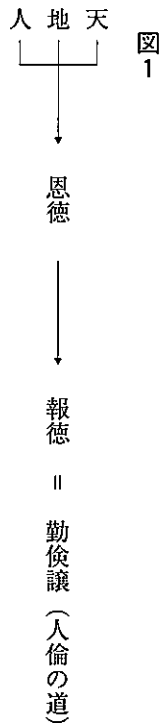
六 天祖推譲を以って人道を立つ

さて、人倫の道（人道）は具体的にはどのようにして形成されてきたのだろうか。まず尊徳の語るところを聞いてみよう。

「ただひとり山野に生れて、左右に他の人がなければ、飢えて食い、渴して飲み、疲れれば限り、目がさめれば起き、巢や穴に住んで一身を養うだけで、ほかに何の欲求もない。これが天道自然の生活である。それからして、今日得たところのものを明日に推し譲り、今月得たものを来月に推し譲り、今年得たものを来年に譲りのこすことが始まる。それが人道である。天照大神は推譲によって人道を立てられた。だから茫茫たる豊原が瑞穂の国となった。それから後に、儒教や仏教の学問も入って来て政治教化の助けになったのである。しかし、そのうちに、そういう学問がはびこって、ついに天照大神の開国の道を埋め滅ぼすまでになった。たとえば落葉が積り積って山道を埋めかくしたようなものだ。残念なことに、天祖の道がほとんど滅びて、世にあらわれないことすでに久しいものである。私はその落葉をかきわけて天照大神開国の足跡を見とどけ、それにもとづいて荒地を開き廢国を興こす方法を設けた。だから、いやしくもわが法による以上は、荒廢を開き興こすのは何も難しいことではないのだ。」

ここに「讓（または推譲）」という言葉が登場する。讓の前提を「勤・儉」といい、この三つを合わせて「勤・儉・讓」という。これが報徳における人倫の道であり、人道である。「勤・儉・讓」の反対が「怠・奢・奪」であり、これが鳥獣道・畜道である。勤・儉・讓については次のように説明されている。

「わが道は勤儉讓の三つにある。勤とは、衣食住になるべき物品を勤めて産出することをい



う。儉とは、産出した物品をむやみに費やさないことをいう。讓とは、衣食住の三つを他に及ぼすことをいう。この讓には、いろいろある。今年の物を来年のために蓄えるのも讓だ。それから子孫に讓るのと、親せき友人に讓るのと、郷里に讓るのと、国家に讓るのとがある。その身の分限によって、つとめて行なうべきだ。たとい一季半季の雇い人でも、今年の物を来年に讓るのと、子孫に讓るのと譲りは、必ずつとめるがよい。この勤儉讓の三つは、かなえの三本足のようなもので、一つでも欠けてはならない。必ず兼ね行なわねばならぬ。」

勤・儉・讓という概念を介在させると、「開国の道」についての理解がいつそう深まる。

「思うに、天照大神の開国の術は、讓道にある。わが開墾の法は、一両の金で荒地一反歩をひらき、その産米を一石と見る。これを全部食って譲りのこすことがなければ、百年たつてもその田はただの一反にすぎない。ところが、もしそのうちの九斗を食い、あとの一斗を讓つて、雛形〔報徳の精神による村おこしの事業、つまり報徳仕法の具体的な進め方を標準的なマニュアルにしたもの〕のとおり年々起し返してゆけば、六十年の後には、積んで相当の反別になる。あるいはそのうち二斗を譲り、あるいは三斗から五斗と、多く讓るにしたがつて、その数はますますおおきくなり、天下の荒地という荒地がひらきつくせるまでになる。まったく、大古の時代には、貨幣はもちろん、鋤・鍬・鎌などの農具もまだ備わっていなかったのに、

讓道一つによって、ちゃんと開けたのだ。まして、あらゆる器財がそろっている今の世で、荒地をひらき、廢国を興こすのに、なんのむずかしいことがあるか。」

つまり、芦ばかりが茫茫と茂っていた我が国を勤儉讓の実践によって稲穂の輝く瑞穂の国に切り開いて下さったのが天照大神という「人」——神のような人——であり、これが「開国の道」なのである。

開国の道は稲作・農耕という経済的な活動であると同時に、勤儉讓という人倫の道なのである。つまり経済と倫理・道徳とが混然一体となつて包含されているのである。だからこそ報徳の思想は「道徳経済一元」と称されるのである。なお、第三章「報徳は神儒仏三味一粒丸」の中で「開国の道はとりあえず経済」と書いたが、ここで訂正させていただきたい。この道徳経済一元の思想をさらに明白に裏打ちしているのが「田徳」という言葉である。

七 「田徳」は人倫を扶助する

尊徳は『三才報徳金毛録』の中の「田徳人倫ヲ扶助スルノ解」〔全集〕一卷三一ページ〕という文章の中で、次のように述べている。〔全集〕の編集者佐々井信太郎の現代語訳による。〕

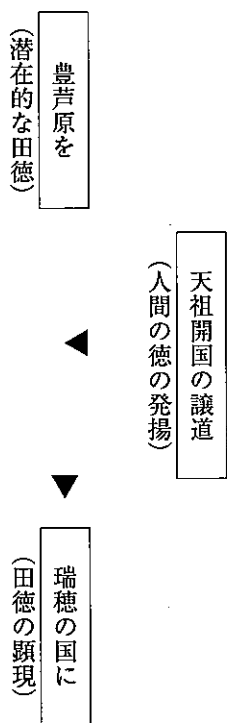
「それ元一円無田であった。無田が変じて一田が開かれた。一田があれば十田が開かれる。十田があれば百田が開かれ、百田があれば千田が開かれ、千田があれば万田が開かれる。万田の本は無田であった。無田であった時は生養が保てない。田畑があるから生命が育てられる。田徳があるから君も君たり得る。田徳があるから父母にも父母らしくできる。田徳があるから自己も保てる。田徳があるから妻女も子孫も親族も養える。田徳があるから衆民も生きられる。田徳があるから財宝ができ、交友も保て、諸芸もでき、車馬も所持し、万器も整えることができる。もし田畑が無ければ人類であつても人類らしい生活ができない（人倫ヲシテ人倫ヲラシメルコトヲ得ズ）。このゆえに日本は天照大神のころから、支那（漢土）では堯や舜（いずれも中国古代の伝説上の聖王）の代から自ら鋤鋤を執つて一戸割当の田畑を耕し、天子が自ら先んじて農業を勤め、もつて人民がこれを学ぶようにした。誰でもそれ（ソノ徳）を忘れてはならぬ。」

「田徳」という言葉自体が「財徳元一円（道德経済一元）」という思想を象徴しているといつてよいであろう。第一章「議論の前提——「報徳とは——」」の中で紹介した「万象具徳」という考え方に従えば、「田畑にも徳がある」というのは当然の帰結である。さて、この「田徳」という言葉をつかつて、「開国の道」についての尊徳の説明（『語録』二）を解釈してみるならば、次のようになる。

豊芦原という荒地地にも田徳となるべき可能性が潜在しており、この荒地地に対して勤・儉・譲という人間の徳を發揚することによつて——これが「天祖開国の讓道」——瑞穂の国という田徳の充滿する国を開くことができたのである。図式化すれば、次のようになる。尊徳が「財徳元一円」と言っているのも、納得がいくであろう。

さて、しかしながら、すべての稲作・農耕——および、すべての経済活動——が「財徳元一円（道德経済一元）」なのではない。報徳を深く理解し、報徳の信念で実践すれば、という条件つきで

図 2



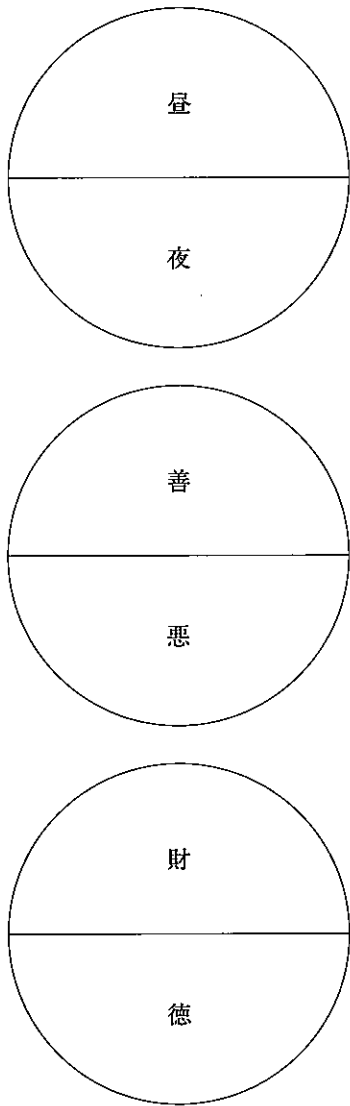
ある。ここに次なる難問が姿を現してくる。「怠・奢・奪から勤・儉・讓への心田開発」というテーマであり、これが「治心の道」である。

「治心の道」がいかに難しいか——難しい、と尊徳が考えていたか——『夜話』（四六、原書二）の次の言葉が端的に物語っている。「やかましく、うるさく世話をやいて、ようやく人道は立つのだ」。このテーマは軽々には扱いくく、論ずると長くなるので、残念ながら、今回の小論では言及を避けて、別の機会に譲ることとしたい。

ところで、道徳と経済とを調和させようとする思想は、報徳のほかにもいろいろある。たとえば渋沢栄一の「右手にソロバン、左手に論語」という思想もその一つである。もちろん大変に重要な、高く評価すべき思想ではあるが、これは一元論ではなく、二元論——経済（ソロバン）と道徳（論語）という二つのものを調和させようとするもの——である。

尊徳も、若い頃、小田原で、「五常講」という倫理的な金融組織を創設したが、これも五常（仁・義・礼・智・信）という倫理的な行為規範と講という経済活動との二つを融合させようとしたもので、やはり、一元論ではなく、二元論である。その後、尊徳は、報徳という思想体系を構築することによって、その思想を深化させ、「財徳元一円」という一元論に到達した、と理解すべきである。ところで、「一円」という思想も報徳哲学の特徴をなすものの一つとして、大変に重要なものである。「陰と陽」「善と悪」「貧と富」などのように相対立するものを対立したままに、一方だけに偏って見る見方のことを「半円の見（半円観）」というのに対して、これら対立するものを一段高

図3



い立場から統合して見る見方のことを「一円の見（一円観）」と尊徳は名づけている。そして、尊徳は、このような見方・考え方を「円相図」と呼ばれる図解によって表現している。

今、昼だとすると、肉眼には昼の景色が映っている。夜の景色は映っていない。しかし、昼は夜が夜になる。昼は昼だけでは存在しうるものではない。夜があつての昼であり、昼があつての夜である。現実世界は昼と夜とに分かれていても、両者は根本的には一つである、と見る見方が「一円観」なのである。

そして、尊徳は、この一円観をいろいろな場合に当てはめてみて、「一元一円混沌」とか、「昼夜一元：昼夜ノ元ヲ悟レバ不二元」「善悪ノ元ヲ悟レバ不二元」「徳体財体一元：財徳ノ元ヲ悟レバ

不二元⁽²⁾」などと表現している。これが尊徳の「一元一元論」である。

八 若干の釈明

最後に、いくつか釈明をさせて頂きたい。一つは、我が国における稲作・農耕の開始に関することである。歴史的事実としては、我が国の稲作は、今から約二千数百年前に中国大陸から伝来したものであり、尊徳の主張とは相違^{ちやうい}している。

だが、尊徳は歴史科学的な学説を提唱^{ていしやう}しているのではなく、豊芦原を瑞穂の国に開闢した「開国の道」の持つ意義の重要性を指摘しているものであり、しかも、これを弟子たちが報徳仕法を実践するに際しての訓戒^{くんかい}として論^{ろん}しているのである。

二つ目もこのことと関連しているのだが、開国の道の樹立を天照大神の業績としている点である。通常、天照大神は、古代日本の神話の世界の主神であり、天皇家の祖神とされているが、尊徳はそのような意味で天照大神の名を挙げているのではなく、古代中国の堯や舜などの「聖賢^{せいけん}」と比肩^{ひけん}しうる「実在の人物」として言及しているのであることは、第七章で引用した「田徳人倫ヲ扶助スルノ解」に見られる通りである。

これも、目的は「弟子への訓戒」であり、農耕による開国に際しての先人たちの労苦^{ろうく}を抽象的に語るよりは、「天照大神のひと歟ひと歟」というような表現のほうが、これを聞く者に対するインパクトは、はるかに強烈であるといつてよいであろう。

なお、ついでながら、尊徳は「藤曲村仕法書」と呼ばれる事業計画書の中で、「書経」(堯典)を引用して、次のように聖賢堯の徳を称えている。

「帝堯・・・充^ま二^ま恭^まシク克^まク讓^まル」

この文は「大学」(伝第九章第三節)の「一家讓ナレバ一国讓ニ興ル」という文と共に、尊徳が「讓」という報徳における中心概念の一つを唱道^{しやうどう}する上での有力なヒントになったものと推察される。

さて、釈明の最後は「道徳」という用語についてである。本論は「報徳における道徳と経済」と銘^{めい}うっておきながら、「道徳とはなんぞや」という定義らしきことには言及しなかった。そして道徳という用語に代わるもの——あるいは相当するもの——として「人倫の道」(または「人道」、具体的には「勤儉讓」という言葉を用いてきた。そもそも筆者は「報徳」という思想体系の全体がきわめて倫理的道徳的な性格を備えていると認識しているからである。

しかしながら、やはり、「道徳」そのものについても論究^{ろんきゆう}すべきであったと反省している。尊徳自身、「五倫五常」「善心悪心」「空仁二名論考」など、倫理道徳に係わるテーマに関して注目すべき議論を数多く展開している。

ただ、道徳というテーマは、特に「規範(ノーム)」という概念との関連で、複雑で微妙な論点

を多く含んでいるので、短い論考の中で言及することには、多少ためらいを感じたことも事実である。この点、ご容赦頂きたいと念ずる次第である。

〈注〉

- (1) 佐々井典比古「報徳の生き方・考え方」『かいびやく』第四十巻第十一号、一九九一年〜第四一巻第四号、一九九二年、一円融合会刊、および富田高慶原著、佐々井典比古訳注『補注報徳記』(巻一、第三章「小田原侯、先生に桜町領復興を命ずる」)一円融合会刊、一九五四年、参照。
- (2) 佐々井典比古「報徳の生き方・考え方」『かいびやく』第四十巻第十一号、一九九一年〜第四一巻第四号、一九九二年、一円融合会刊。
- (3) 佐々井典比古『尊徳の裾野』一三三頁「いっばい世界のふえ世界」有隣堂、一九九八年。
- (4) 斎藤高行原著・佐々井典比古訳注『報徳外記』第二章「報徳」一円融合会刊、一九五八年。
- (5) 岡田良一郎(二八三九〜一九一五) 遠江(とおとおみ) 国佐野郡倉真(くらみ) 村の地主・岡田佐平治の長男。十六歳のとき日光今市で晩年の尊徳に師事し、報徳仕法の実地を体得した。のちに父佐平治の跡を継いで倉真村の地主となり、遠州地方の各地に設立されていた多数の報徳社を集結し、明治四四年(一九一〇)、大日本報徳社を設立して初代社長に就任した。淡山と号する。『報徳学齊家談』二宮大先生伝記『淡山論集』などの著作がある。
- (6) 大日本報徳社。二宮尊徳が創始した報徳仕法のやり方を自治的な協同組織として継承・発展させたのが「報徳社」であり、尊徳の存命中から遠州(静岡県)を中心に多数設立されていた。これらを集結して、明治四四年(一九一〇)、大日本報徳社が設立され、現在に至っている。初代社長は岡田良一郎。現在、社団法人、本社は掛川市、加盟約五〇〇社。月刊雑誌『報徳』を刊行している。

- (7) 佐々井信太郎責任編集『二宮尊徳全集(三六巻)』(以下『全集』と略記) 初版・二宮尊徳偉業宣揚会一九三二年、復刻版・龍溪書舎、一九七七年、第一巻「原理編」二九ページ「不徳ガ賊乱ヲ生ズルノ解」より。なお、「徳ハ本ナリ・」という語句は儒教の経典『大学』の中の「伝第十章第八節」からの引用である。
- (8) 福住正兄原著・佐々井典比古訳注「訳注二宮翁夜話」(以下「夜話」と略記)、一円融合会刊、一九五八年、一七五、原書番号統一五、原書番号とは『全集』に収載のもの番号のことで、岩波文庫版もこれと同じである。ただし、本論考では佐々井典比古氏訳出の一円融合会刊の章番号を用いた。
- (9) 『全集』一巻一四〇ページ。
- (10) 八木繁樹『定本報徳読本』緑陰書房、一九八三年、第十九章「道徳経済一元の道」。
- (11) 斎藤高行原著・佐々井典比古訳注「訳注二宮先生語録」(以下「語録」と略記) 一円融合会刊(一九五八) 二五。
- (12) 『夜話』三六、原書三三一。
- (13) 『全集』一巻四八〇ページ「悟道草案」。
- (14) 『全集』一巻五七五ページ「報徳訓」五九。
- (15) 『語録』二〇六。
- (16) 『語録』一。
- (17) 『語録』二。
- (18) 『夜話』二二二、原書・続四三。
- (19) 『語録』三。
- (20) 二宮尊徳原著・佐々井信太郎訳注『報徳文献選集』三二ページ。
- (21) 村松敬司「報徳一円」日経BP社、一九九一年、第四章「洪沢栄」。
- (22) 『語録』四四二「半円の見と一円の見」、三五四「陰陽相まつ」、三九五「迷悟は一つ」など参照。
- (23) 『全集』一巻七二、七八、一四〇ページ。図は筆者が一部簡略化。
- (24) 『全集』一巻二三三ページ。
- (25) 『全集』一巻七二二ページ。
- (26) 『全集』一巻七八二ページ。
- (27) 『全集』一巻一四〇ページ。
- (28) 『全集』一九巻三五三ページ。

〔参考文献〕

- 佐々井信太郎責任編集『二宮尊徳全集（全三六巻）』初版 二宮尊徳偉業宣揚会 一九三二年、復刻版 龍溪書舎 一九九七年。
- 二宮尊徳原著・佐々井信太郎訳注『報徳文獻選集』一円融合会、一九九二年。
- 齋藤高行原著・佐々井典比古訳注『訳注二宮先生語録』一円融合会、一九九三年。
- 齋藤高行原著・佐々井典比古訳注『訳注報徳外記』一円融合会、一九九三年。
- 福住正兄原著・佐々井典比古訳注『訳注二宮翁夜話』一円融合会、一九九三年。
- 佐々井典比古『尊徳の裾野』有隣堂、一九九八年。
- 佐々井典比古『尊徳の森』有隣堂、一九九八年。
- 佐々井信太郎『二宮尊徳の体験と思想』一円融合会、一九六三年。
- 下程勇吉『二宮尊徳の人間学的研究』広池学園出版部、一九八八年。
- 二宮尊徳生誕二百年記念事業会報徳実行委員会編『尊徳開顕』有隣堂、一九八七年。
- 児玉幸多責任編集『二宮尊徳（日本の名著）26』中央公論社、一九八四年。
- 八木繁樹『ほうとくまんだら』不二出版、一九八三年。
- 松村敬司『報徳一円』日経B P社、一九九一年。
- 神谷慶治監修『二宮尊徳と現代日本人』信山社出版、一九八七年。
- 佐々井典比古『報徳の生き方・考え方』『かいびやく』第四〇巻第一一号、一九九一年、第四一巻第四号、一九九二年。
- 下程勇吉他『特集・二宮尊徳研究』『モラロジー研究』第二九号、一九九〇年。